

HPVワクチン
(子宮頸がんワクチン)

副反応被害報告集

愛知県第1集

2014年10月

全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会 愛知県支部

薬害対策弁護士連絡会

薬害オンブズパーソン会議

目 次

N-1 番	-----	3
N-2 番	-----	9
N-3 番	-----	14
N-4 番	-----	20
N-5 番	-----	25
N-8 番	-----	32
N-9 番	-----	39

本書について

本書は、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会が実施している子宮頸がんワクチン被害実態調査から、聴取した被害内容を収録したものです。

調査は、薬害対策弁護士連絡会及び薬害オンブズパーソン会議の協力のもと、両団体に所属する弁護士による聴き取り調査の方法で行われ、現在も継続して行われています。

2014年3月の調査開始から現在までに聴取を行った被害者本人及び保護者のうち、聴取内容を陳述書形式で公表することについてご承諾を得られた方の聴取結果を本書に収録しています。

本書の内容は、すべて2014年10月時点の情報に基づいて作成されています。

N-1 番

1 はじめに

私は、平成9年2月21日生まれで平成26年6月現在17歳の女子です。中学2年生の平成22年10月から中学3年生の平成23年4月にかけて、3回にわたり子宮頸がんワクチンであるサーバリックスの接種を受けました。

それまでは、学校には風邪をひいた時以外は毎日通っていましたし、美術部での部活動や運動会での応援団の活動にも参加するなど学校生活全般に積極的に参加し、とても楽しく充実した学校生活を送っていました。私には、中学1年生のときから入学したいと志望していた高校があったので、中学3年生からは塾にも通い初めて、高校受験に向けて準備もしていました。

また、学校外でも週1回合気道に通い、年1回の演舞会にも出場していましたし、心身ともに健康に過ごしていました。

2 子宮頸がん予防ワクチン接種を受けることにした理由

平成22年9月、学校で名古屋市健康福祉局健康増進課発行の「子宮頸がんワクチン予防接種費用助成についてのお知らせ」という書面と「子宮頸がんワクチン予防接種（費用全額助成のお知らせ）」という表紙に女の子の絵が描いてあるパンフレットが配布されました。

このパンフレットには、「子宮頸がんは予防できるがん」などと書いてあって、内容を読むと、このワクチンは唯一ガンを予防できるワクチンなのだという印象を抱きました。

そのため、学校の同級生もみんな子宮頸がんワクチンを受けていて、友達同士の間で「子宮頸がんワクチンうけた？」とか「めっちゃ痛いよ」などと話題になっていました。

私の周りの友達は、すでにワクチンを接種している子が多く、「まだうけてないの？」と聞かれました。私は、家に帰ってから、母にそのことを話したところ、母も子宮頸がんワクチンはみんなが接種しており、学校からも手紙をもらい、CMやラジオからも勧められ、また、無料で受けることができることもあって、あおられるように、ワクチンを接種することになりました。

3 予防接種ワクチンの接種

平成22年10月14日、私は、近所のかかりつけのクリニックで1回目の接種を受けました。ワクチンはサーバリックスでした。接種を受ける際に、医師からどのような説明がされたか、今でははっきりとは覚えていませんが、口

頭で、筋肉注射だから痛いよという程度の説明しかありませんでした。本件ワクチンについての有効性や副反応について説明は特にありませんでした。

接種後、注射された上腕が腕を上げると痛みましたが、我慢できる程度でしたし、2、3日程度で回復しました。

平成22年11月11日に2回目の接種、平成23年4月28日に3回目の接種を受けました。この時も、1回目と同じように、注射された腕が2、3日は痛みましたが、我慢できる程度でした。

ただ、2回目の接種以降、頭痛がおきる回数が増えて、頭痛薬をのむ頻度が多くなっていました。今、思い返すと、これが子宮頸がんワクチンの副反応の前兆だったのかもしれない。

4 予防接種ワクチン接種後の症状

平成23年9月29日、この日は中学校の運動会でしたが、私は、長縄飛びの競技中に、急に意識が遠のいて、倒れてしまいました。

私は、この運動会のために応援団として、応援のための踊りを企画したり、後輩を取りまとめたり、とたくさんの準備をしてきて、まさに集大成の日でした。なので、ものすごく楽しかったはずなのですが、自分でも不思議なことに、倒れる直前直後だけでなく、この日1日の記憶が断片的にしかありません。

私は、気がつくと、保健室に運ばれていましたが、意識が戻っても、頭・顔が熱く、手足のしびれで感覚がなく、身体に全然力が入らない状態で、立つて歩くことすらできませんでした。

保健の先生からは過呼吸か熱中症だと思う、すぐ治ると言われましたし、その日の夕方にかかりつけの病院を受診した際にも、すぐに治ると言われました。

しかし、翌日なっても、翌々日になっても、症状が良くならなかったため、再度かかりつけ病院を受診したところ、先生も驚いた様子で、ギランバレー症候群の疑いがあると言われて、A病院での診察をすすめられました。

10月1日に、A病院を受診して、手足全体の痺れ、足首の痛み、脱力、感覚過敏（足が触れるとムズムズする感覚）、歩行困難などの症状があることを伝えたところ、ギランバレー症候群、多発性ニューロパチーの疑いとのことので即日入院することになりました。

入院中は、CT、MRI、神経電気生理検査等を受けましたが、いずれも異常なしという結果でした。

小児科の担当医師は、原因が分からない限りは投薬しない、という方針の先生でしたので、原因がよく分からない状況で、効果が分からない治療や投薬がされるということはありませんでしたが、症状が改善されることもありませんでした。ただ、リハビリとして、杖を使つての歩行訓練を受けて、とてもゆっ

くりと短い距離ですが自分で歩けるようになったので、10月22日に退院しました。

退院後も、症状に大きな変化はありませんでしたが、車いすを使ったり、行き帰りは母に車で送迎してもらったり、移動教室の時には友達に支えてもらいながら、学校には何とか通っていました。

しかし、結局、公立高校の受験を諦めざるを得ませんでした。私は、中学1年生の時から志望していた公立高校があったため、中学3年生になってから塾にも通い始めて、あともう少しで内申点も合格圏内に入るという状況だったので、諦めなきゃいけないと思ったときは、とても悔しかったです。

私は、私立高校に進学することになりました。なぜなら、設備が整っていて、障害があっても、車椅子を使うことになっても受け入れて下さるとおっしゃったからです。

A病院には、定期的に通院して、造影CT検査、髄液検査、ポリフィリン症の検査、ベーチェット病の検査を行いました。異常は見られませんでした。

平成24年3月、小児科の担当医師が転勤すること、中学校卒業という年齢的に小児科の担当外になること、他の科への引継ぎが特になされることになかったこと等から、見放されたように感じたため、A病院へ通院もやめました。

また、セカンドオピニオン先の医師から、一度、心療内科へ行くよう勧められていたため、平成24年2月から何度か通院しました。もともと、私は、家族も認めるくらい前向きで明るい性格であったため、家族ともども精神的な疾患が原因ではないと思っていましたが、この症状が治るのならばと、藁にもすがらる思いで心療内科を受診しました。

しかし、抗うつ剤を処方されて3週間服用した後、特に症状の改善がなかったところ、心療内科の医師が、さらに抗うつ剤を増量して処方しようとしたため、信用できなくなって、通院をやめました。

また、他の病院もいくつも受診しましたが、結局、どこの病院に行っても原因が分からず、やはり精神的な疾患であると言われることが多かったため、病院にもほとんど行かなくなりました。

唯一、平成24年5月頃から、知人に紹介された接骨院には定期的に通院していました。その接骨院での施術を受けていますが、施術後は一時的にでも症状が軽くなるように感じました。

毎週のように施術をうけて、杖が無くても歩行できるようになった時期もありましたが、その後も、手足の脱力、足のムズムズ、歩行困難、頭痛が繰り返し起こりました。生理も不順になり、生理痛もひどくなりました。

ほかにも、食べ物によって症状が悪化することが分かりました。例えば、化学調味料を多く使っている料理や、チョコレートを食べると、次の日以降に症

状が悪化するのです。なので、大好きだったチョコレートも食べられなくなってしまいました。また、低血圧がひどく、B大学付属病院にて、血流をよくする薬を処方してもらい症状が改善した時もありましたが、その薬を服用すると、逆に動悸が激しくなってしまう時もあり、服用はやめました。低血圧は相変わらずひどいです。

5 現在の状況

進学した高校では、杖をついていることに周囲から奇異の目で見られてしまい、あまり馴染めずに通学することができなくなってしまいました。そのため、通信制の高校に転学しました。

通信制の高校では、成績も上位で、先生からも誉められることが多くありました。

ところが、平成25年8月24日、突然、症状が悪化してしまい、全身の脱力、頭の重さ・痛みがひどく、肩の重さ・痛みがあり、座っていても横になっていても全身がしんどい、微熱が続く状態になってしまいました。

そのため、学校にもほとんど行けなくなり、それまでは週3回通学できていたのに、現在は、週1回2時間しか授業を受けられなくなっています。

また、授業中も、座っていることすらしんどいため、机に伏せたり、目をつむってしまうことが多くなってしまいました。その他、物忘れがひどくなり、学校の先生の話がぼーっとしながら聴いていることもあり、先生から、「聴いてるの？」と授業中に注意されてしまうことがありました。

今は、現在通院している病院の医師から、子宮頸がんワクチンの副反応の疑いで、持続的に低血圧のため高度の頭痛・全身倦怠感があり、日常生活動作を障害しており、授業に集中できないこと等もあるとの診断書をもって、学校に提出したところ、先生も理解してくれたため、注意されることはなくなりましたが、私にとってはとても辛いことでした。

さらに、私はもともと本を読むのが好きで、以前は1日1冊読書していたくらいでしたが、最近では、本を読んでも書いてある内容が理解できなくなってきています。

6 多くの医療機関の対応

これまでの間、たくさんの医療機関を受診し検査してもらいましたが、はっきりした原因を明らかにしてもらえないことはできませんでした。まさか、子宮頸がん予防ワクチンと関連があるとは考えてもいませんでした。

もっとも、子宮頸がんワクチンと関係があるのではないかと思い始めてから、

医療機関に子宮頸がんワクチンとの関係性を聞いてみても、関係ないと言われるばかりでした。

それどころか、精神的なものだとか、子宮頸がん予防ワクチンの副反応は一部の女の子が騒いでいるだけのことだと言われたりして、私に現実に起こっている症状を認めてくれて、原因を突き止めてくれようとした医療機関はありませんでした。

7 子宮頸がん予防ワクチンの副作用の疑いでの診療

平成25年9月になり、子宮頸がん予防ワクチンとの関連性を認めてくれる医師に診察してもらうことができました。

それ以降、その医師に受診するために、月1回ほど片道3時間かけて遠方の病院に通っていますが、交通費が嵩むため、両親には経済的な負担をかけてしまっていると思います。

8 終わりに

子宮頸がん予防ワクチンを接種しなければ、私の症状は起こらなかったと考えています。私は、このワクチンのせいで、中学3年生から高校3年生という楽しいはずの3年間をすべて奪われてしまいました。

以前の中学校生活がとても楽しくて充実していたので、身体が元気なままだったら、中学3年生の残りの生活をどれほど楽しく送れただろうかと思うと、今でも口惜しくて仕方ありません。中学で仲がよかった友だちとも、連絡することもなくなってしまいました。あのまま元気だったら、今どれだけ楽しく生活していただろうかと思うと、悔しくて仕方ありません。

また、中学1年生のときから入りたい高校があって、その高校に入るために一生懸命勉強して、もう少しで受かるかもしれないというところまで頑張っていたのに、結局、受験することすらできなかったことも、とても悔しいです。将来は、看護師になりたいと思っていましたが、歩行困難などの症状や、理解力が落ちてしまったことから、希望がかなえられるか、不安を感じています。

ワクチンの副反応だと分かるまでの間、たくさんの病院をまわりましたが、原因が分からず、あるいは精神的なものだと決めつけられました。

でも、このワクチンの副反応という症状は、私に現実として起きていることです。まずはそのことを理解してもらいたいです。そのうえで、このワクチンの副反応という症状について、研究して治療法を一刻も早く見つけてもらいたいです。

私は普通に中学生、高校生として経験できる大切なことのほとんどを経験することができませんでした。当たり前前に経験できるはずのことができない

ことは、私にとっては辛くて、悔しくて仕方がありません。本来なら将来に向けて進めているはずで、皆は普通に進んでいるのに私は同じように進むことができません。

このワクチンによって失われた三年間はとても大きいもので、二度と帰ってこないし、楽しく過ごすはずだった学生生活は、取り返すことも出来ません。

だから、一日でも早くこの症状を治し、これから先の将来、たくさんの経験をして、夢を叶えて、人生を存分に楽しみたいです。これから先の一生を、たとえ失われた三年間は取り返せなくても、その三年間を忘れてしまうぐらい楽しく、幸せに過ごしたいです。このワクチンに一生までも狂わされたくありません。幸せになりたいです。

N-2 番

1 はじめに

私は、平成9年5月31日生まれ、平成26年7月現在、17歳の女子で、高校2年生です。子宮頸がん予防ワクチンの接種時は中学2年生でした。

ワクチンを接種するまでは、学校を休んだことはありません。幼稚園の頃から皆勤です。私は、とても健康で、既往症はありませんでしたし、アレルギーもなかったです。体を動かすことが大好きで、運動の中でも特に走ることが好きで、毎日ランニングをしていました。通っていた中学校には陸上部がなかったので、部活は吹奏楽部に所属していました。水泳やダンスも好きで、習っていました。ダンスは幼稚園の頃からずっとレッスンを受けていましたが、ワクチン接種後に断念することになってしまいました。

2 ワクチン接種をした経緯

いつごろだったかよく覚えていませんが、保健所から子宮頸がんワクチンを受けてくださいというハガキや封書(3回分のチケット付のもの)が来ました。また、通っていた中学校でも、子宮頸がんワクチンを受けてくださいねと言われた覚えがありますし、実際に、私の友達もみんなワクチンを受けていたので、母と相談して私もワクチンを受けることにしました。

3 接種と接種後の症状

私は、平成23年8月30日と平成23年9月30日に、自宅近くのクリニックでサーバリックスを接種しました。ワクチンの内容や副反応について具体的に説明を受けた覚えはなく、文書を手渡されて読んでおいてくださいと言った感じでした。注射そのものによる痛みについては、既に接種をしていた友達から痛いと聞いて心構えができていたからか、特別痛いという印象はありませんでした。そして、2回目の接種後1か月程度は、特に何も不調を感じませんでした。1か月程度で後述する症状が出てきたので、3回目の接種はしていません。

4 接種後3か月頃まで

私は、平成23年10月27日に手の関節の痛みを感じました。当時、文化祭の準備をしていて、ユーフォoniumやピアノの練習をしていた影響で痛みが出たのかなあと感じていました。実際に10月29日に、近医の整形外科を受診したところ、手・指の使い過ぎとの診断でした。

ところが、11月に入っても手の痛みは引かないばかりか、指から肘に痛みが広がっていき、握力の低下も生じるようになりました。当時、指や手首に湿布を張って勉強したりしていましたが、パソコンでタイピングをするのにも痛みを感じました。その後、手に力が入らないということを実感するようになりました。また、足は大丈夫と続けていた駅伝大会の練習中にいつも走りきれぬ800メートルを完走できず、自分の思う通りに自分の足が動かない回らないという感覚がとてもショックで、今でもその時のことは鮮明に覚えています。

そして11月9日には、幼稚園からずっと続けてきたダンスのレッスンに参加することを断念し、この日以降は参加できていません。11月半ばには、足に力が入らなくなり、11月18日、近医の神経内科クリニックを受診しましたが、血液検査の結果は異常がなく、思春期特有の精神的なものかという診断でした。この頃、両手の握力7Kgまで低下していました。12月に入っても症状は良くなりませんでした。

この頃の症状は、上肢については、指、肘、肩の関節にジンジンするような痛みがありました。そして、触れた個所以外の場所に痛みを感じました。手に力が入らず筆圧も低下しました。力が入らないので箸も持てないという状態でした。下肢については、指の関節、足首、膝、股関節にジンジンする痛みを感じました。また、足も力が入りませんでした。力が入らないため、ジャンプが全くできない状態となりました。そして、足を上げることが大変になり、階段の昇降が困難になりました。階段を上り下りする際には、手すりを持って一段ずつ上り下りしました。足の歩幅も短くなり、素早く足を動かさないために歩く速度もかなり遅くなりました。

5 接種後3か月～1年

年明け以降のことを以下に述べていきます。症状は相変わらずで、学校では、教室移動が大変困難でした。平成24年1月16日、私は、学校の階段で動けなくなり、先生に担がれ保健室に連れて行かれました。その後、教室に戻りましたが、授業終了時の挨拶のとき、倒れてしまいました。その日は、担任の先生が学校から家まで送ってくれました。その後も同じような事が何回もありました。翌1月17日、A医療センターを受診しました。ここでは、血液検査、神経伝導速度、筋電図、MRI等いくつかの検査をしましたが、異常は認められず、最終的に診断名はつきませんでした。1月18日、歯医者からの帰宅途中、駅の通路で足の付け根に激痛を感じ動けなくなるということがありました。1月19日、足の指が全部霜焼けになってしまいました。私は、今まで霜焼けには一度もなったことがありませんでした。1月20

日にピアノのレッスンを受けましたが、この時には、椅子を高くして上から指を落とすようにして何とか音を出している状態で、長い曲だと痛くて演奏できなかったです。1月22日、しもやけ・冷え性に効くと言われたため、風呂で手足を水とお湯に交互につけてみました。ところが、その直後に痛みが増強してしまい、その日は痛くて寝付けませんでした。

A医療センターの医師から並行して心療内科の受診を勧められ、2月15日に心療内科クリニックを受診しました。ここでは、身体表現性障害（疑い）と診断されました。カウンセリングを受け、その後、平成25年5月まで受診を継続しました。3月末に、学校の行事で30Kmのロングウォーキングに条件付きで参加しました。杖を突きながらの参加でした。途中で母の車で移動したりもしましたが、なんとか完歩することができました。

4月になり中学3年生になりました。しかし、この頃も、不調が続いており、私自身が不調に耐えられなくなり、休みたいとの思いもあったので、自ら希望して5月21日からB大学附属病院の精神科病棟に1週間検査入院しました。総合内科も受診しました。しかし、診断はつきませんでした。幸い精神科医からリリカという薬を処方され、痛みが軽減しました。

5月29日～31日、修学旅行に行きました。1日目は元気に過ごすことができました。しかし、2日目は朝から起き上がれず、国会議事堂は車いすで回ることになりました。8月に6校の高校体験入学に行きました。この時は、杖を突いて回りました。このように、この頃もずっと体調の不良は続きました。

6 接種後1年～2年

平成25年2月に私立高校入学試験、3月に公立高校一般入学試験があり、志望していた高校に合格できました。ワクチンを接種後、体育の実技授業は見学状態となり、内申点が下がってしまいました。何とか頑張って志望校に合格できて良かったです。自宅からは少し距離がある高校です。具体的には、高校の最寄り駅まで電車を一回乗り換えて約50分、更に駅から高校まではひたすら坂道を徒歩15分です。当時、私は自分の状態を心の病気だと思っていたので、高校に入学して環境が変われば完治すると期待していましたが、体の不調は全く改善されないで、5月頃に学校の先生に体調の不良を伝えました。学校はその後、様々な面で配慮をしてくれています。部活はスーパーサイエンス部に入部しました。手の力がないうえにできないことも多いです。タンポポの調査のために学校周辺を歩きまわったときは、後で両足の感覚がなくなり、痛みがひどかったということもありました。

5月に学校のオリエンテーション合宿がありました。ウォークラリーやキ

キャンプファイヤーの出し物は友人に助けてもらいながら参加しました。ウォーケラリー後は足の感覚がなく痛みもひどかったので、保健の先生に湿布を貼ってもらって少し休みました。また、球技大会ではバスケットボールに参加しましたが、形だけの参加でした。

9月の文化祭には支障なく参加しましたが、体育大会のダンスは大変でした。当初、ダンスは無理と思い、別の部門への参加を希望していましたが、先輩達の励ましにより参加することになりました。練習の後などは杖が必要でした。体の不調を抱えながらのダンスは大変でしんどいことも多かったです。本当に楽しかったです。この頃、学校でクラスの副室長になり、朝、学校についてから3階の教室と1階の職員室を往復するようになりました。

また、この頃、私が入っていたSNSサイトで子宮頸がんワクチン被害のブログを見つけ、連絡を取ったところ、私の症状は子宮頸がんワクチンの副反応だと確信し、被害者の会に入会しました。

7 接種後2年経過以降

平成25年12月5日、被害者の会を通じてC大学附属病院を受診しました。

D先生に診てもらおうとワクチンの副反応の典型的な症状だと言われ、そこで1回目の点滴治療を受けました。12月11日、D先生の紹介でE医療センターを受診しました。ここで週1回の点滴治療を受けることになり、現在も継続しています。注射薬剤は、リメファー3B注射薬10ml、プリンク注シリンジ5 μ g1ml、生理食塩液100mlです。点滴による血管拡張作用のため血管痛の副作用が最初はありましたが、徐々に軽減していきました。

年が明けて平成26年1月、寒さの影響もあり杖を突いて登校しました。家から高校最寄り駅まで乗り換えをしなくてもよい駅まで車で送ってもらい、電車を降りてから学校までは坂が登れないためバスを利用しました。その後、暖かくなって徐々に体調は回復していきました。2月8日、部活の大会に出場しました。雪が積もっていましたが、杖を突きながら電車と徒歩でなんとか会場にたどりつけました。3月、学校行事であるスポーツ大会の競技には参加できませんでした。

4月になり、私は高校2年生に進級しました。5月28日から、高校の修学旅行に行きました。2泊3日でしたが、杖を使って旅行しました。杖を突いて歩行の補助をしなければならない日は今でもあります。

8 現在も残る症状

手に関しては、力が入りません。シャーペンを親指でノックするのが困難で

す。重いものが持てません。電車のつり革が持てません（持っても体を支えられない）等の症状が残っています。

足に関しては、足の指先が思い通りに動かさません（つま先で立てない）。足首の周りが動かしづらいです。少し走れますが、走った後、足の感覚がありません。朝起きたときに足を動かしづらいです。足が上がらないので、階段の昇降がづらいです。片足で立てません。体操座りからは支え無しでは立ち上がることができません。なので、和式トイレには入れません。

全身に関して残っている症状は、倦怠感です。ひどい時は座っているのもつらいです。発熱も増えました。そして、特に寒いと調子が悪くなります。

9 今後

来年度、大学受験を控えています。少しでも早く回復したいです。現時点で志望している大学は寒い地方にある大学なので、早いうちに不自由なく歩けるようになりたいです。子宮頸がんワクチンについて思うことは、副反応が出たときの治療を確立してほしいということです。この副反応が完治したら、フルマラソンに出場して完走したいと思っています。

10 終わりに

手の関節の痛みを感じたあの日から、どんどん痛みが全身にひろがって、昨日できていたことができなくなっていく不安を抱え、怖くて辛い日々が続きました。けれど、私は、周りの方々や両親のおかげで高校生をしています。私は本当に周りの人に恵まれました。痛くて、歩けなくて、正直学校に行きたくないと思うこともありましたが、学校に辿り着けば、先生や友人が支えてくれました。今でも、学校に行くのがしんどいなと思うことがありますが、行きたくないと思うことはありません。この3年間で失ったものは大きいし、辛いことばかりだし、何でこんな目にあわないといけないのだろうかと思ってしまうこともありますが、この経験は私を成長させてくれると信じています。力のない手ですが、多くの人からもらった優しさ、温かさを両手で持てないくらい掴んでいます。だから、私は前向きに毎日を過ごせています。

私が今こうして充実した日々を過ごせているからこそ、学校にも行けない被害者の方を思うと、胸が痛いです。

N—3番

第1 はじめに

私は、平成23年7月から同年9月にかけて、2回にわたり子宮頸がんワクチンであるサーバリクス（以下、「本件ワクチン」といいます）の接種を受けました。

以下で、私が本件ワクチンを接種するに至った経緯と、本件ワクチンによる副反応被害についてお話しします。

第2 本件ワクチン接種に至る経緯

1 本件ワクチン接種までの状況

(1) 接種前の生活

私は、高校1年生の7月に第1回目の接種をしましたが、それまで特に持病は無く、花粉症のようなアレルギー性鼻炎で耳鼻科に年1回病院に行く程度でした。

学校にも普通に通っていました。中学生時代の通学状況は、年に2、3回風邪で休む程度で、高校に入ってから、本件ワクチンを接種するまで、学校をほとんど休んだことはありませんでした。

(2) 接種に至る経緯

本件ワクチンの接種をしたきっかけは、名古屋市からの接種に関する通知を受け取ったことだったと思います。様々なテレビでの報道やコマーシャルを見て、ワクチンを打てば子宮頸がんになるのを防げるのだと思い、接種することにしました。

2 本件ワクチンの接種

1回目の接種は、平成23年7月29日に、内科のAクリニックで接種をしました。既にワクチンを接種した友人から痛いという話は聞いており、実際に注射をしたときは痛かったですが、接種後は特に痛みもありませんでしたし、そのほかに特に気になったことも無かったです。

2回目の接種は、Aクリニックで予約が出来なかったため、内科のBクリニックというところで接種してもらいました。このときも、注射を打った際には、特に何もありませんでした。

なお、1回目の接種でも、2回目の接種でも、病院の方から、ワクチンについて何か説明を受けた覚えはありません。

第3 副反応及び入通院の経過

1 平成23年9月～平成24年4月まで

(1)最初に現れた症状

最初に身体に違和感を感じたのは、2回目の接種から10日くらい経ってからでした。右肩のあたり、脇と肩甲骨の間くらいのところにぴりぴりとした違和感、つる、しびれるといった感じがありました。

当初は、学校が忙しかったので疲れているのではないかという話を母としていました。

ところが、症状は広がり、右肩の次は右手の末端に違和感を感じるようになりました。右手の握力が弱くなり、校舎内で移動する際にノートを落としたり、右手にペンを持った状態からペンが飛んでいってしまったということが起きてきました。

まず右肩に生じ、次いで右手先に生じた異常は、次第に右腕全体に広がるようになりました。

また、その頃には、右足が突然脱力して転ぶことがありました。

(2)C病院での入院と治療

右腕、右足のしびれや脱力が続いたため、10月5日、母の付き添いでAクリニックで受診しました。すると、やはりおかしいと言われ、翌6日にC病院の神経内科で受診し、同科にそのまま入院しました。

その時点で、右手の握力が下がっており、独力で歩くことはできましたが、足は引きずっている状態でした。なお、左手の握力については全く問題なかったです。C病院では、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)であろうと言われ、すぐに検査をしましたが、検査では何の異常も出ませんでした。

10月7日から9日にかけて、1回目のステロイドパルスを、翌週の14日から16日にかけて2回目のステロイドパルスを実施しました。この治療により、少し右腕のしびれが引いた感じで、測定不能だった握力も少し回復しましたが、右足には変化が無く、依然として感覚が鈍い状態のまま足をひきずっている状態でした。

ステロイドパルスが効かないため、免疫吸着療法を実施することとなり、1日おきに2週間行いましたが、やはり効果はありませんでした。27日に、C病院を退院し、通院での受診を継続することになりました。

その後、右手のしびれが再発し、C病院の救急外来を11月6日に受診しましたが、やはり検査で異常は見つからず、最終的に、C病院の医師からは、心因性のものであろうと言われました。

(3)D病院でのリハビリ

11月10日から車いすを使うようになりました。車いすが入らないところでは杖を併用するようになりました。

15日にD大学附属病院（以下「D病院」と言います）の神経内科を受診し、22日から入院して検査をしました。この時点で、右足は完全に麻痺した状態でした。D病院では、特に治療はせず、リハビリをしていましたが、特に効果は感じられませんでした。D病院の医師からも、私の麻痺は普通の麻痺と違うため、リハビリは意味が無いと言われました。私は、右側だけの片麻痺で、左足だけでけんけんて歩ける状態でしたが、普通の麻痺であれば、そんなことはできないはずだと言われました。

D病院は12月13日に退院しました。D病院でもやはり心因性だと言われました。

後になって、D病院のカルテの開示を受けたところ、診断名は身体表現性障害と書かれていました。

その後、母の知り合いの紹介で名古屋市内の心療内科で受診してみましたが、特に問題ないと言われました。

(4) 当時の生活について

当時、私は高校に通っていましたが、私の教室がある校舎にはエレベーターが無く、階段で上るしかありませんでした。麻痺をしている右足を引きずってしまわないよう膝を折ってテープで巻いて固定するなどしていました。その他の移動では、ずっと車いすを使っていました。

麻痺した右足は、最初のうちは特に痛みもなく、感覚が無い状態でしたが、足にテープを巻いて学校に行ってから痛みが生じるようになりました。痛みは、足の皮膚がずるむけたような感じで、布に触れても痛む状態でした。そうした痛みが治まってくると、今度は疼痛がするようになりました。

2 平成24年4月～平成25年5月

平成24年4月のある日、急に右足の輪郭がはっきりと感じられるようになり、歩くことができるようになりました。それまでは、足の感覚がなく、まるで足が無いように感じられていました。

それ以降、長距離走の後など、時折右足が脱力したり、けいれんすることはありましたが、それ以外は比較的普通の生活ができるようになりました。

当時の右足の状態は、週に数回、内側が沸騰しているような違和感がありました。右足に痛みがあり、D病院や他の整形外科に通っていましたが、「しばらく足を使っていなかったせいでしょう」というくらいの診断でした。

このような形で、高校2年生の間は、ほぼ通常通り通学することができました。

3 平成25年6月～平成25年12月

(1) 症状の再発

平成25年6月10日ころから、足がつって目が覚める、歩いている途中に右足が重くなって階段が上れなくなるといった症状が出るようになりました。次第に、左足もつるようになり、その日によって、右足がつったり、左足がつったりといった状況でした。

6月24日の早朝目覚めたときに両足がつり、いったん寝て再び起きたら、右足が動かず、車いすで登校することになりました。

当時の症状としては、右下肢の脱力で、痛みの発作を伴っており、これは以前は無い症状でした。また、入浴やシャワーを浴びる際のお湯や湯気、強い日差しなどに触れると、身体にじわじわと痛みが生じ、そのうちに一気に痛みが強まって、痛みが爆発するように感じるものがしばしばありました。とにかく痛みがひどく、息が止まるくらいのもので、痛みで意識をなくし、お風呂場で倒れたこともありました。

(2) 夏休み頃までの治療の状況

6月24日の午後にAクリニックを受診し、翌25日にC病院に入院しました。そのときの診断は急性脊髄炎で、以前の入院との関連や、当時報道されていた子宮頸がんワクチンとの関連はわからないと言われました。

同月27日から29日にかけてステロイドパルスを行い、テストが控えていたことから7月1日に退院をしました。退院後は、痛み止めとして、リリカ、後にテグレトールを処方されました。

退院後もめまいやふらつき、右手の違和感は残り、右半身の脱力も継続していて、なかなか学校に行くことはできませんでした。C病院には外来で受診して痛み止めをもらっており、7月末頃に、テグレトールをトリプタノールに変更しました。

8月4日に、東京の国立Eセンターを紹介され、受診しました。過去の検査資料などを持って行ったところ、病名がどうということはないが、子宮頸がんワクチンを受けた他の患者さんと似ているねと言われました。

8月に入ると、目が痛くなり、ろれつが回らないような症状が出てきました。8月13日には、光が目にしみるような不快感や痛みがあり、右手握力の低下が著しく髪を結べない、食欲が低下し、夜ご飯しか食べないという状態でした。同月18日からは、入浴を母に介助してもらうようになり、部屋にいるときもまぶしくてカーテンを閉めて生活をしていました。痛みはずっとあり、痛み止めの薬を飲み続けていました。落ちる心配があるため、階段にも上れない状態でした。

8月20日、C病院に外来受診したところ、症状が悪化していたため、翌21日から入院することになりました。そのときは、身体の右側について、

青あざを押されているような痛みがあり、多発性硬化症疑い、末梢神経障害性疼痛と言われました。ステロイドパルスを2回実施し、多発性硬化症疑いのまま9月5日に退院しました。退院後は、痛み止めとしてリリカとトラムセットを処方されており、それが現在まで続いています。

(3) 2学期に入ってから生活及び治療の状況

2学期に入ってからほとんど学校には行けず、休日に1、2時間ほど補習を受けて、なんとか通学扱いにしてもらっていました。頭痛がひどくなかなか起きられないことが続いたり、微熱が継続し、脱毛も目立つようになってきました。

その頃受けた頭部MRIで、プラークを疑う病変があると言われました。それは平成23年頃からあったようですが、麻痺に関わる部分とは逆だったため、診断とは関係ないと言われました。

10月28日に、F大学病院のG先生に見てもらいましたが、規則正しく生活するよう言われただけでしたので、受診は1回だけでやめました。後になって開示を受けた同病院のカルテには、頸部痛、脱力などと書かれていました。当時は右手右足に力が入らず、車いすを使用しており、痛みがひどくて起きられないこともあるような状態でした。

12月頃からは整体で少し調子が良くなりました。この頃からまた右足が上がるようになり、車いすを使う頻度も減りました。ただ、15分くらい経っていると足が赤くなり、足の裏が痛くなってくるため、車いすを使用します。また、心臓の痛みもあり、車いすに乗っていても動悸や息苦しさを感じるがありました。

第4 現在の状況

1 生活について

平成26年に入ってからそれなりに通学でき、1、2時間から長いときで4時間ほど学校に行くことができました。そのようにして、3月ぎりぎりまで通学して出席日数を稼ぎ、何とか高校を卒業することはできましたが、とても大学受験をすることはできず、4月からは浪人することになりました。

1年ぶりくらいに体調が落ち着いており、今日（平成26年7月2日）は久しぶりにバスと地下鉄で駅前にある塾へ行く予定です。

2 通院について

今年の4月になって、県外のHセンターに行くようになりました。まず、4月に検査入院をしました。この際には、C病院で採取した髄液を持って行きました。検査の結果、記憶と小脳に関する数値に異常値があると言われま

した。次いで、5月12日から19日まで入院してステロイドパルスを実施しました。心電図検査もしましたが、特に異常はありませんでした。

6月16日から20日まで3回目の入院をして、ステロイドパルスを実施。7月15日から4度目の入院をし、3回目のステロイドパルスを予定しています。

HセンターではHPVワクチンによる副反応の疑いと言われています。

3 症状について

現在の症状としては、心臓の痛み、右足の痛みの他、ホットフラッシュのような状態になるというのがあります。脱力は、以前の麻痺状態の頃に比べるとましになりましたが、右手の脱力・けいれんは残っています。

第5 おわりに

副反応の症状が出るようになって、様々な病院で受診をしましたが、理由もよくわからないまま「心因性」と判断され、納得がいきませんでした。現在も原因はわからず、将来のみえない不安な日々を送っています。

副反応の症状のため、私は通常の高校生活を送ることができず、3年生のときに大学受験をすることもできませんでした。また、治療費など親に相当な経済的負担を掛けてしまっていると思います。

母の話では、私と同じような症状でC病院で受診している人たちがいても、診療科が人によってバラバラで情報の集約が出来ているのだろうかということでした。多くの人に実態を知っていただき、一日も早く治療法を見つけていただきたいです。

N－4番

1. はじめに

私は、平成4年3月21日生の平成26年6月現在22歳です。子宮頸がんワクチンの接種を受けたときは、専門学校の1年生でした。

小学校から高校を卒業するまでは、学校をほとんど欠席することはなく、専門学校にもほぼ毎日通学していました。専門学校では、デザインを学んでいました。

2. 接種のきっかけ

私が子宮頸がんワクチンの接種を受けたきっかけは、母からのアドバイスでした。母は、友人から、その知人の娘さんが子宮頸がんワクチンの接種を受けたということを聞き、私の年齢的に抗体が備わるとされていたギリギリのタイミングであったことや、がんのリスクを一つでも減らせられればということを期待し、私のことを考えて勧めてくれました。母と私は、当時は副反応に関する報道や情報等は一切無く、癌を予防できるものであれば、予防するに越したことはないという気持ちでした。

3. 接種時の状況

平成23年3月8日、近隣の総合病院において、第1回目の子宮頸がんワクチンを接種しました。ワクチンを接種する際、母も同席していました。

病院では、接種前に、製薬会社が作ったと思われる説明文書を手渡されました。それを私と母とで読み、同意書部分にサインしました。やはり副作用等に関する記載は特に記憶に残っておらず、医師からも詳細な説明はありませんでした。このときは、注射をされた方の腕が、筋肉痛のような痛みはあったものの、特に変調はありませんでした。接種後30分は待合室で様子を見るように看護師から指示がありましたが、その際は30分経過後も特に異常がなかったため、そのまま帰宅しました。

第2回目の接種は、同年4月5日に受けましたが、この時も筋肉痛のような痛みがあっただけで、特に他の症状はありませんでした。

第3回目の接種は、同年9月20日に受けました。この時も打った直後は筋肉痛のような痛みがあっただけでした。

なお、第2回目と第3回目のときも、接種後30分間は様子を見てから帰宅しました。

4. 接種直後の状況

私は、第3回目の接種を受けた9月20日の深夜になると身体が熱くなってきて、体温を測定したら38.6度まで体温が上昇していました。

翌朝、私は、接種を受けたのと同じ病院の内科を受診しました。対応してくれた医師は、注射を打った後に時々熱が出る人がいるけど、たいしたことはないでしょうということで、カロナールを処方して、安静にするようにといわれました。たしかに、安静にしていたところ、発熱は9月22日には下がっていた記憶です。

ところが、私は、第3回目の接種を受けてから最初の生理前の高温期に、以前にはなかった火照りを感じるようになり、実際に体温を測定したところ以前より平熱が高くなっていました。しばらくは、生理前の高温期の微熱が続いていたくらいだったのですが、半年くらい経った平成24年3月頃から、歩いていると地面がゆれるような感覚を覚えるようになりました。そして、専門学校の通学で歩いているときにも、地面がゆれるような感覚がすることがあったり、気持ち悪くなることが度々ありました。それでもなんとかがんばって専門学校には通えていましたし、学校が休みの日には、ほぼ全日コンビニエンスストアでアルバイトができていました。

5. 症状の悪化

平成24年5月4日、私は、友人と遊びに行ったのですが、出先で気分が悪くなってしまい、20時ころに帰宅しました。そのときは、突然気持ちが悪くなり、めまいがするようになりましたが発熱等はありませんでした。原因はよくわかりませんでした。

当時、口の周囲に肌荒れがあり、ステロイドの塗り薬を使用していました。そこで、ステロイドが原因になったのではないかと素人なりに考えました。私は、母と共に、ステロイドの投与を受けていた病院の休日診療を受診しました。そこで、症状を伝えて、ステロイドの関連性を尋ねたのですが、医師によれば、そこまで強い薬は投与していないので、影響は考えにくいということで、一般内科を受診するよう勧められました。

そして、ゴールデンウィークが明けた5月7日、私は、近所の診療所(内科)を受診しました。原因は不明だが、メニエール病が疑わしいということで、めまいを改善する薬を処方され、様子を見るようにということでした。しかし、状態は改善しませんでした。

そして、耳鼻科を受診するようということ、耳鼻科を紹介されました。耳鼻科では、メニエール病ではないということまではわかったのですが、特に病名は言われませんでした。

ただ、血圧が低いことが関係していて、自律神経に問題があるかもしれないといわれ、自律神経に関する薬を処方されました。しかし、この薬を飲むと体調がより悪くなってしまいました。そのため、飲むのを中止しました。

平成24年8月14日、私は風邪をひいたのですが、予防接種を受けた病院を受診し、風邪薬を処方されました。ところが、私はその薬を服用したところ、気分が悪くなり、体調が非常に悪くなりました。そして、翌日、より体調が悪くなったこともあり、同じ病院の救急を受診したのですが、待っている間に失神してしまいました。その後、点滴を受けたのですが、結局、風邪が治った後も、気持ち悪さとめまいは続きました。

平成24年10月、甲状腺からくるものではないかということで検査を受けましたが、異常はみられませんでした。また、同年12月に、婦人科を受診し、プロラクチンの高値が原因かもしれないという疑いを指摘されましたが、そのときはしばらく様子を見てみましょうということでした。

平成25年4月19日、病院にもう一度診てもらおうと、接種を実施した病院の婦人科を受診しました。医師は、詳しい検査等をするのではなく睡眠のリズムが悪いからだということで、睡眠薬を処方されました。しかし、夜は十分な睡眠を取っていたというか、取らざるを得ない状況にあったことから、睡眠リズムが原因とは考えられず、薬を飲むと症状が悪化するので睡眠薬は飲みませんでした。

以上が子宮頸がんワクチンの副反応について、情報を持つ以前のことで

す。

なお、プロラクチンについては、平成26年6月、別の診療所を受診し、女性ホルモンの検査をしましたが、プロラクチンの数値は高いものの、ワクチンとの因果関係は分からないということで、不調との関連性はわかりませんでした。

私は、症状が現れてから2年以上になりますが、それ以前のような体調は戻らず、生きていく意味がないということを考えざるを得ない毎日を送っています。

6. ワクチンが原因と疑ってからの接種実施病院とのやりとり

母が、平成25年5月ころ、週刊誌で子宮頸がんワクチンの副反応についての記事を読み、部分的に、私の症状と似通っているところがあるなど思ったとのことでした。そして、テレビでも、子宮頸がんワクチンの副反応に関する番組を見たとのこと、週刊誌とテレビで紹介された症状や経過を見て、どうも私は子宮頸がんワクチンの副反応で現在の症状が出てい

るのではないかと疑いを持つに至りました。

そして、平成25年5月8日、私と母とで、接種を実施した病院の婦人科を受診し、私の症状は子宮頸がんワクチンの副反応ではないかと言うことを単刀直入に聞いてみました。

医師は、詳しい検査等をすることもなく、絶対に違うと即断しました。そして、心療内科を受診することを勧められました。

私と母は、検査等をせずに、ワクチンとは関係ないということその日のうちに言い、最後には心療内科に行くようにと言う患者への配慮のない態度の医師に不信感を抱きました。

7. 現在

私は、診療に結びつくような治療をしてもらえる病院が見当たらないため、現在はどこにも通院していません。気休めかもしれませんが、漢方薬を飲んで様子を見たりしています。

私は、結局、学校は何とか卒業したものの、就職はできませんでした。今では、体調がよければ、少し外出することは可能ですが、ほとんど毎日家において、体調が良いときがあれば、家事を手伝っている状況です。なお、アルバイトは、平成24年4月まで行けていたのですが、5月に体調が悪くなってから思うように働けなくなり、一旦長期休暇をもらいました。7月くらいに1, 2回様子見ということで、短時間試しに働いてみたのですが、やはり体調的に追いつかないということで、結局辞めざるを得ませんでした。

私は、季節の変わり目は特に状態が悪くなることが多いのですが、特に暑くなる季節は体調が悪い傾向にあります。月に1, 2度くらいの頻度で、調子がいいときには、外出をしたりするのですが、その反動で翌日から寝込んでしまうほど疲れがたまることがあり、思うように身体を動かせない毎日です。

集中力が続かなくなったこともあり、車の運転もほとんどできなくなりました。周囲に注意を払って運転するという作業を長時間続けることが出来なくなったためです。

また、副反応と考えられる症状が出てから、食べる量が減りました。元々は、約48kgの体重だったのですが、現在は42kg程度しかありません。食が細くなり、体重が増えないのも、副反応が影響しているのではと思っています。

私が働けないこともあり、母のパートで得た給料の大半は、私の年金代等のために充てられている状況です。

8. おわりに

私が今考えていることは、簡単に子宮頸がんワクチンの予防接種を受けるべきではなかったという、その一つだけです。国が勧奨し、医療機関でも止められなかったということで、何ら疑いを抱くことはありませんでしたが、もし副反応が出現する可能性があるということを知っていれば、もう少し慎重に接種するかを検討していたと思います。

私は、就職を諦め、日々自宅で過ごしています。元気であれば同世代の人と同じように普通の生活をし、やりたかったことがたくさんあったのに、それらを思い通りにやれない現状がとても悲しいです。将来に対する不安も言葉では言い表せません。

とにかく、私を、ワクチン接種前の元気な状態に戻して欲しいというのが最大の願いです。そして、患者全員が、症状がよくなる治療を受けられる援助等が拡充するように、制度の充実を望みます。

第1 はじめに

私は、平成23年9月から平成24年2月にかけて、3回にわたり子宮頸がんワクチンであるサーバリックス（以下、「本件ワクチン」といいます。）の接種を受けました。

その後、私は本件ワクチンによる副反応被害を受けていますので、その被害についてお話しします。

第2 本件ワクチン接種に至る経緯

1 本件ワクチン接種までの状況

(1) 接種前の健康状態

私は、5才くらいまで熱性けいれんがあり、てんかんの検査をしましたが問題はなく、その後は、特に大きな病気をしたことはありません。

小学校四年生でインフルエンザの予防接種を受けたときに、じんま疹が出て発熱があったことがあります。中学校一年生、三年生でインフルエンザの予防接種を受けたときは特に問題はありませんでした。

小学校も中学校も体調不良で休んだことはほとんどありませんでした。

(2) 本件ワクチン接種に至る経緯

本件ワクチンを接種する前、保健所からも子宮頸がんワクチン接種を呼びかける葉書も送られてきましたし、テレビではCMも流れていました。

私の母は、卵巣腫瘍で卵巣を摘出したことがあり、女性特有の病気に敏感であったようで、私に、本件ワクチンを接種するよう勧めてきたため、私も接種することにしました。

そして、私は中学3年の平成23年9月26日、風邪などでいつもお世話になる近所の病院（以下、「A病院」）で本件ワクチンの接種を受けました。

2 ワクチン接種時

私は、A病院では計3回本件ワクチンの接種を受けましたが、そのとき、医師や看護師から本件のワクチンの有効性や副反応について説明を受けていません。

事前に裏にワクチン接種についての注意書がある問診票への記入を求められ、筋肉注射だから痛いということと、接種後30分は病院に留まるように言われただけで、それとは別に本件ワクチンについての有効性や副反応について説明はありませんでした。

私は、本件ワクチンの注射がとても痛いものだとかなり覚悟していましたが、1回目の注射は思ったより痛くありませんでした。2回目の注射は少し痛かったですが、3回目は一番痛くありませんでした。

注射のあとは、二週間くらいは注射をした箇所がだるかったくらいで、特に気になることはありませんでした。

第3 副反応について

1 突然の失神

上記のとおり、本件ワクチンを接種したあとは、注射をした場所がだるいくらいでしたので、あまり気にせず、私は、その後、平成24年1月12日に2回目の本件ワクチン接種を受けました。

2回目のワクチン接種を受けたあと、3回目を受けるまでの間に、突然、学校で倒れたことがありました。その時は、病院で血液検査を受けましたが、検査結果に異常はなく、当時は原因はよく分かりませんでした。

しかし、当時は、単なる貧血か何かだと思っていたので、その後、平成24年6月21日に3回目の本件ワクチン接種を受けました。

2 全身の激しい痛みの出現

本件ワクチン接種から8ヶ月後、私は高校受験を控えている時期でしたが、平成25年2月1日、ふくらはぎがものすごく痛くなりました。私は、普段はほとんど泣いたりしないのに、そのふくらはぎの痛みは堪えることができず、思わず泣きながら母に痛みを訴えました。

翌日、成長痛ではないかと母が言うので、近所の整形外科に行き、レントゲンを撮りましたが、特に異常は無く、湿布と痛み止めをもらって、様子を見ることとなりました。

それから、歩くのがしんどかったので杖を買ってもらい、一週間くらい様子をみましたが、ふくらはぎの痛みがなくなるどころか、痛みが全身に広がりました。また、特に、朝起きると身体に力が全然入らない日もありました。

2月7日、A病院の小児科へ行って、経緯を説明したところ、市立B病院を紹介されたため、翌日に市立B病院に行きました。

3 通院治療

(1) 診断名がつくまで

平成25年2月8日、私は、A病院から紹介されたB病院を受診し、血液検査とMRI検査を受けましたが、結果がでるのに時間がかかるということで、一週間後に予約を入れて、その日は帰宅しました。

ところが、2月11日の朝、家でトイレから出たところで、体が動かなくなると倒れてしまいました。母が、B病院に電話したところ、夜8時で

あれば夜間診察できるとのことで、夜に母に連れられて救急外来に行きました。医師から入院するかどうか聞かれ、わが家は母子家庭で、母は翌日も仕事を休むこともできず、妹も学校があるため、母が私を家に一人でいさせるのは不安ということで、私はそのまま5日間ほど入院することになりました。

入院中は、頭、腰、足などのMRIやレントゲンを撮ったり、神経伝達の検査をしたり、整形外科、膠原病内科にもかかりました。しかし、貧血症だということは分かりましたが、身体中の痛みについては、膠原病か線維筋痛症が疑わしいと言われたものの、正確な診断名は出されず、しばらく経過を見ながら検査を続けることとなりました。

B病院を退院してからは、体の痛みと脱力がひどい日と少しましな日が繰り返し、痛みがひどい日は、こんなに痛いならいつそ死んでしまったほうがいとすら思ったときもありました。それでも、痛みが控えめな日は、杖をついたり、車いすにのったりしながらも、1時間でも2時間でもできるだけ学校に行きました。

私はちょうど、高校受験の時期で、私立高校の受験日は、たまたま痛みがあまりでなかったのがなんとか受験して合格することができましたが、志望していた公立高校は、自宅から比較的遠く、坂道を上らなければいけないため、このまま症状が続けば、受かっても通学できないと思い、断念せざるを得ませんでした。

また、色々検査をした中で、大腿骨に腫瘍が見つかり、大学病院を紹介してもらい受診しましたが、腫瘍は良性で問題ないとのことで経過観察となりました。

平成25年4月に私は高校に進学しました。登校の際には杖を使う必要がありました。

私は小学6年のころにいじめを受け、1週間ほど学校を休んだことがありました。中学でもいじめはありましたが、休まず通うことができていました。高校進学後、すぐに仲のいい友達ことができましたので、体調はすぐれませんでした。学校に通うことを楽しみにしていました。

4月下旬には、新入生向けの一泊の合宿があつて、体調が不安でしたが、友達もいるので、何とか参加しましたが、2日目には気分が悪くなり痙攣も起こしてしまい、あまり記憶がありません。

そんな矢先の4月末に、急に耳鳴りと頭痛が酷くなってしまい、B病院の救急外来を受診しました。血液検査と脳のCTを撮ってもらいましたが、やはり異常はありませんでした。その日の夜は、耳鳴りが酷くてほとんど眠れませんでした。

その後、小児科の先生から、やはり線維筋痛症だと思いと診断されましたが、確信はもてないとのことでした。そこで、セカンドオピニオンをとるため、母がインターネットで調べて、線維筋痛症の症例を多く扱っているC病院へ紹介状を書いてもらいました。

そんな中、5月中旬頃、母は知人から、私の症状は子宮頸がんワクチンの副反応ではないか、テレビで特集をやっていた、という話を聞いたようで、母は、私の症状は本件ワクチンが原因ではないかと考えるようになりました。

私は、当時、B病院の小児科の発達障害や精神科を専門に診ている医師にもかかっていたのですが、6月6日に、その医師を受診した際に、母が医師に対して、子宮頸がんワクチンが原因ではないかと話しましたが、その医師は、接種から8か月も経っているので違うと思う、と話していました。

(2) 線維筋痛症とその治療

平成25年6月11日、私はC病院の心療内科を受診しました。C病院のD医師は、心療内科だけでなくリウマチの治療も合わせて行っているとのことで、圧痛点の検査やアンケートの結果、線維筋痛症とリウマチ、うつ病もある、という診断を受けて、セレナール錠、セルベックスカプセル、マイスリー錠、プロチアデン錠を処方されました。C病院の心療内科には、2週間に1回程度、通院することになりました。

母はD医師にも子宮頸がんワクチンの副反応ではないかと話しましたが、やはり違うと言われました。

この頃、私は、学校の体育の授業はいつも見学していましたが、日に当たって耳が赤く腫れ、痒くなることもありました。

また、7月になると、吐き気を感じる日が多く、ご飯を食べても食べなくても気持ち悪くなりました。学校に行けても、痛みで授業に集中することが難しく、授業の内容も覚えることができませんでした。

7月中旬頃には、痙攣がひどくなって、私の意思とは関係なく、足が勝手にブラブラと動くこともありました。

第4 子宮頸がんワクチンとの関連性についての診断

1 子宮頸がんワクチン接種勧奨中止

平成25年6月、厚労省が子宮頸がんワクチン接種の勧奨を止めたという報道がありました。そして、母は、友人から本件ワクチンの副反応事例を聞いたり、私と同じような症状が報道されるのを見て、ますます疑いを深めていきました。

2 子宮頸がんワクチンとの関連性について診断

同年8月12日、私は、被害者連絡会から教えてもらった東京の病院（以下、「E病院」）を受診し、同病院の医師から今までの症状が他の子宮頸がんワクチンを打った人たちと同じ症状だと説明をされました。

しかし、治療のためにはE病院に月1回程度は通院しなければならないと言われましたが、名古屋から東京に月1回も通うことは経済的にも身体的にも難しかったので、E病院への通院は諦めました。

一方で、B病院の小児科の発達障害や精神科を専門に診ている医師には月1回ほど診てもらっていましたが、転換性障害の疑いであり、子宮頸がんワクチンの副反応ではないと言われました。

3 平成25年9月以降の症状

9月から2学期が始まりましたが、朝から身体中が痛かったり、時には左足だけ力が入らず歩けなくなってしまうこともあったので、出席率は半分くらいでした。また、学校でも手や足の痙攣がでることがあって、友達も初めはわざと揺らしているのと揺らす真似をしていましたが、「そんな小刻みに揺らせないや」と、私の手足に痙攣が出ると、心配して保健室に連れて行ったりしてくれるようになりました。このように、私の症状を理解してくれる友達のおかげで、学校も何とか通えていました。

9月末頃には家族で買い物中に、ショッピングモールで失神してしまい、救急車で病院に運ばれたこともありました。私は、貧血もありましたが、貧血で倒れるときは、血の気がサーっと引いて自分が倒れるのが分かりますが、痛みが原因の場合は激痛と共に倒れるので、いつ倒れたのか記憶にないのです。

また、この頃から、目の眩しさを強く感じるようになり、目が痛くて霞んで見えるようになったので、母にサングラスを買ってもらいました。

10月以降になると、ますます症状が酷くなり、学校には週1回程度しか行けなくなってしまいました。また、学校に行っても教室移動などの移動が徒歩ではできなかったので、校内に車いすを持ち込むことになりました。

このように、学校の先生方も、私の症状を理解してくれて、期末試験を別室で受けるなどの取り計らいをしてくれたので、何とか1年生の単位はとることができました。しかし、今後も同じような出席率であれば、出席率が足りず、留年せざるを得ないということと言われましたし、私も身体的に通学することが辛かったため、結局、高校を辞めて通信制の高校に転校しました。

第5 現在の状況

1 高校生活

現在、私は、北海道の通信制の高校でイラストの勉強をしています。通信制なので、基本的には自宅で勉強していますが、イラストを書きたくても、両手の握力が低下していて、ペンが握れずにイラストが書けない日もあります。自宅がエレベーターのないアパートの3階のため、病院などで外出する時の階段の上り下りがとても辛く苦勞しています。

また、単位を取るためには6泊7日の北海道でのスクーリングに参加しなければなりません。この6泊7日のスクーリングにきちんと参加することができるのか、途中で体調が悪くなってしまわないか、今からとても不安です。

2 その後の通院

本年4月14日～18日に県外の病院（以下、「F病院」）にて脳のスペクトル検査・MRI・髄液検査などを行い、子宮頸がんワクチンの副反応による高次機能障害と診断されました。

その後、5月13日～19日には再入院をして、ステロイドパルスを受けました。6月と7月にも受ける予定です。

ステロイドパルスを受けてみて、痛みとしては、最高10として、平均8だった痛みが、7.5に下がって少し痛みは和らいだように感じますが、手足の力が入らないという脱力症状については、相変わらず続いています。

その後、6月18日、突然、激しい頭痛と過呼吸の発作の後、記憶障害が酷くなり、自分の名前、家族の顔も分からなくなりました。翌日、記憶は戻りましたが、分からなくなった日の記憶がなくなってしまったようです。

また次に同じような発作がおきたらと思うととても怖いし、不安です。

第6 さいごに

これまで、私は、色々な病院を受診し、検査や治療を受けてきましたし、整体やホメオパシーなどの民間療法も行ってきましたが、明らかに効果があるといえる治療法は見つかっておらず、この先、高校が無事に卒業できるのか不安な日々を過ごしています。

「がんを防ぐことができる」と思って本件ワクチンを接種しましたが、こんな副反応症状が出るとは想像もしませんでした。

本件ワクチンを接種するまで普通にできていたことが、今は困難でそんな自分をもどかしく、とても悔しい思いをしています。

国や自治体には、一刻も早く、子宮頸がんワクチンの危険性と有効性を明らかにして、治療方法を確立してもらいたいと思っています。

また、我が家は母子家庭で、私の治療を続けるには、経済的な負担がとて

も大きいです。ですので、ワクチンの副反応患者に対する経済的支援策も早く講じてもらいたいと思っています。

N－8番

第1 はじめに

私は、平成23年11月から平成24年5月にかけて、3回にわたり子宮頸がんワクチンであるガーダシル（以下、「本件ワクチン」といいます）の接種を受けました。

以下で、私が本件ワクチンを接種するに至った経緯と、本件ワクチンによる副反応被害についてお話しします。

第2 本件ワクチン接種とその後の症状

1 本件ワクチン接種までの状況

(1) 接種前の生活

私は、元教員で、近年は実家の家業を手伝っていました。

実家は農家で、農作業から梱包・出荷まで、ひととおりの作業を行っていますので、私はほぼ毎日仕事に出ていました。

接種前、私は花粉症（イネ科）のほか、甲状腺機能低下症がありました。しかし、花粉症については、1年に1か月間くらい、花粉の時期にオノンやアレグラという薬を飲む程度でしたし、甲状腺機能低下症も基準値をやや外れる程度でしたので、服薬などはしておらず、たまに血液検査で数値を見てもらうだけでした。

その他に健康上の問題はありませんでしたので、仕事も家事・育児も、特に休むことはありませんでした。

(2) 接種に至る経緯

本件ワクチンの接種をしたきっかけは、医師に勧められたことでした。

私には3人の息子がいますが、3人の出産でお世話になったAクリニックで、産後のフォローや日常的な健康相談などを受けていました。

平成23年11月にも、不正出血と子宮頸がん検査などのためにAクリニックに行きました。そこで、医師から、子宮頸がんの危険性について話を聞き、ワクチン接種を勧められたのでした。

2 本件ワクチンの接種及び副反応について

(1) 1回目の接種は、平成23年11月22日でした。

その後、失神や首の痛みなど、様々な副反応と思われる症状が出ました。

しかし、当時の私は、症状とワクチンの関係を疑っていませんでしたので、2回目・3回目も接種してしまいました。

2回目の接種は、平成24年1月17日でした。

3回目の接種は、平成24年5月8日でした。
接種したのは、いずれも、Aクリニックでした。
以下で、時系列に沿って詳しくお話しします。

(2) 1回目の接種

上で述べたように、私は他の用件でAクリニックに行き、本件ワクチン接種を勧められ、本件ワクチンを接種しました。

接種前に聞いたことは、もっぱら子宮頸がんの怖さについての話で、「ほとんどの女性が感染していて、そのうちの一定割合が発症する」「このワクチンはそのリスクを回避できる」「10年は効果があるので安心」「このワクチンで子宮頸がんを予防し、ピルで子宮体がんを予防すれば完璧」などという話を聞きました。副反応のことは一切聞きませんでしたし、書面も見せられませんでした。

話を聞いて、そんなに怖いがんを予防できるなら良いなと思い、接種を決めました。1回目は、左肩に打ちました。

接種時の痛みは、「注射の中では痛い方」という感じでした。私は出産もしていますし、もっと痛い注射も経験していますので、痛みの閾値が比較的高いかもしれません。いずれにしても、我慢出来ない痛みではありませんでした。

接種後、パンフレットと説明書を渡され、「よく読んで」と言われました。パンフレットはMSD社のものだったと思います。緑のラインを覚えていています。説明書には副反応のことも書いてありましたが、1%とか10%とか書かれていても、まさか自分にそれが当てはまるなんて思ってもみませんでした。

(3) 1回目の接種後

ア 1回目の接種後、打った肩の辺りがしこりを持ったように腫れ、熱を持った感じに痛くなりました。少し経つと、痛みが引いて、かゆくなってきました。痛みからかゆみになり、それらが全部引くまでに、だいたい1週間くらいかかりました。

イ 接種をしてから2日後の、平成23年11月24日、私は自宅で不意に意識をなくしました。また、自分でも分かるほど、脈が飛ぶような、乱れた感じがありました。そこで、私はBセンターを受診しました。

さらに、手のしびれも出てきました。不整脈と手のしびれから、もしかして脳梗塞ではないかとも思い、C病院整形外科にも受診しました。

ウ 平成23年12月27日、私は、自分の右耳下や右の首筋のリンパが腫れていることに気付きました。動かすと激痛が走るので、右を向くことが出来なくなりました。

この箇所は、耳の疾患でも、口腔内の疾患でも、その他様々な原因で腫れるところらしく、耳鼻咽喉科や歯科、整形外科を転々として検査をしてもらいました。

結局、原因は分からず、整形外科で「ヘルニアかもしれない」と言われて神経を修復するためのビタミンを処方されたり、抗生剤のタリビットを処方されたりしましたが、それでは治りませんでした。結局、痛みを治めるためのロキソニンをもらって経過観察となりました。

エ 平成24年1月11日、今度は、40度の発熱がありました。本件ワクチンを接種したAクリニックを受診し、抗生物質の点滴に通ったら、3～4日で熱は下がりました。

オ 皮膚に、できもののような赤い発疹も出ました。

よく出来る場所は、髪の毛の生え際や頭皮、首の周りなどですが、後に、足や手など、発疹が出る場所は移動していきました。

カ その他、私は、極端に疲れやすくなりました。朝、なんとか子どもを送り出すと、あとはもうずっと横になっているしかなく、仕事はもちろん、家事も出来ない状態でした。びっくりするほど体力がなくなり、一体どうしたのだらうと思いました。

(4) 2回目の接種

平成24年1月17日、2回目の接種のため、私はまたAクリニックに行きました。そこで、首が痛いことなどを医師に伝えましたが、問題なさそうだと医師の判断で、接種することになりました。

2回目の接種は右の肩に打ちました。

針を刺したときの痛みの程度や、その後の腫れた感じ、1週間ほど痛みやかゆみが続く様子は、1回目の接種とほとんど同じでした。

(3)で述べたような症状は、失神や発熱以外、2回目の接種後も同じように続きました。

その後も、不整脈やリンパの腫れ、首の痛みなどが続き、不安でした。特に、首のリンパのことは、あちこちで受診していたときに、どこかの病院で「悪性リンパ腫かも」と言われたことがありました。その「悪性リンパ腫」という言葉が不安として、私の中でずっと残っていました。

そこで、平成24年5月2日、D市民病院で検査をしましたが、はっきりしたことはわからず、経過観察となりました。

(5) 3回目の接種

平成24年5月8日、3回目の接種となりました。

3回目の接種は左の肩に打ちました。

針を刺したときの痛みの程度や、その後の腫れた感じ、1週間ほど痛み

やかゆみが続く様子は、1回目の接種とほとんど同じでした。

1回目の接種から、仕事も家事も育児もできず、首の痛みや不整脈などの不調が続いていたので、私の不安は募るばかりでした。

(6) C病院での検査

平成24年6月11日、私は再びC病院を受診しました。そして、同月26日、MRIやCT、血液検査など様々な検査を受けました。

そこで、「はっきりしないが総合的にみると、サルコイドーシスの疑いがある」と言われました。私の症状は、皮膚の発疹など、サルコイドーシスの特徴に似ていたようです。もっとも、サルコイドーシスと確定するには、特徴的な細胞が確認されなければならないようで、私にはその細胞が出なかったために「疑い」止まりだということでした。

リンパの腫れについては、ぐりぐりしたものが首の周りにいっぱいあると言われました。さらに詳しく調べるためには、患部を一部取って生検をしなければならないということでした。しかし、頸部という危険のある部位であったことから、C病院ではできないということで、D大学病院を紹介されました。

(7) D大学病院での検査

平成24年6月28日、D大学病院でより詳しく検査をしました。心電図やエコー、皮膚の生検も受けました。

その中には、ガリウムシンチという検査もありました。

これは、放射線を含んだ物質を注射すると、炎症がある場所に放射線の集積が見られるというものです。

私の場合は、肝臓・脾臓と、かかると炎症が集まっていると言われました。

しかし、サルコイドーシスの特徴的な細胞は出なかったということで、ここでも、あくまで「サルコイドーシス疑い」ということでした。サルコイドーシスと確定しないために、難病認定も受けられませんでした。

それから、私は、症状の原因を求めて何度も検査を受けました。

(8) めまいなど

1回目の接種後のように意識を失うことはありませんでしたが、私はめまいにも悩まされました。

平成24年7月26日、私はめまいで倒れ、救急搬送されました。

そのときは、アデホス、メリスロン、グラндаキシンを処方され、メニエールかとも言われました。

1か月くらい服薬を続けると、倒れるほどのめまいは引いていきました。しかし、接種前と比べると乗り物に酔いやすくなり、映像でも、視界

が回るような効果のものはだめになりました。

(9) 記憶障害

3回目の接種のあとから、物忘れが増えるようになりました。

それだけでなく、言葉を言い間違えるようにもなりました。

たとえば、子どもを見送る際、私は「雨が降るから傘を持って行きなさい」と声をかけようと思うのですが、「傘」という単純な言葉が出てこないのです。または、傘とは全く関係の無い単語を言っていることもあるようで、子どもには意味が通じず不思議そうな顔をしています。

これは、後になってから出てきた症状なので、私はどうなってしまったんだろう、これからどうなるんだろうと、不安に思っています。

(10) 網膜剥離

平成25年11月ころ、私は、網膜の炎症を指摘され、網膜剥離の手術をしました。

ガーダシル接種を受けた方で、失明した例もあると聞きます。

手術後、私は定期的に眼科の検診も受けていますが、悪化するのではないかと不安が拭えません。

第3 症状と本件ワクチンの関係について

- 1 私は、はじめは、これらの症状と本件ワクチンとを関連づけて考えてはいませんでした。

しかし、平成24年6月ころ、テレビで、子宮頸がんワクチンの副反応のことが放映され、私もそうなのではないかと考えました。

- 2 私が何より不安だったのは、どんなに検査をしても原因が分からず、薬を処方されても対処療法にしかならないことでした。

私としては本件ワクチンと症状との関係が気になりましたが、病院では、循環器科では循環器、耳鼻咽喉科では耳鼻咽喉科のことしか見てもらえず、全体的な所見をもらえる場がありませんでした。

- 3 また、医師が子宮頸がんワクチン副反応のことを知らないことにも驚きました。

医師は忙しいので、テレビなど普段見ないのかもしれませんが、前提情報がないために、私がワクチンのことを話しても、今ひとつ反応を得られないことが多くありました。

Aクリニックの先生には、ワクチンと症状の関連性について話したところ、「厚労省と戦う気?」「認められるころには寿命だよ(それほど長い時間がかかる)」などと言われました。Aクリニックの先生は、サルコイドーシスについてはいろいろ調べてくれましたが、医師の機嫌を損ねてしまっ

たと思い、それ以来、Aクリニックには行けなくなってしまいました。

唯一、関心を示してくれたのは、不整脈の関係で受診しているE病院の先生でした。それでも、「他にも患者さんがいたら、学会に報告したい」という程度のことで、治療法に結びつくものではありません。

第4 生活への影響

- 1 先ほど述べたように、私は、本件ワクチン接種までは、毎日仕事をし、家事も育児もこなせていました。

しかし、本件ワクチンを機に、動けず横になっていることが増え、痛みのために子どもを抱っこすることもできなくなってしまいました。

私や夫の両親に頼んだり、夫に仕事を休んでもらったりして、なんとか暮らしていましたが、私は、こんな身体になってしまっただけで家族に対して申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。

- 2 経済的負担も大きかったです。

検査を受けるたびに、初診料や検査費用がかかりました。

私は、接種前は仕事をしていましたが、本件ワクチンの接種により体調を崩し、仕事ができなくなりました。そればかりでなく、検査費用などの経済的負担を夫にかけるようになってしまったのです。

特に、接種してまもなくの平成24年は検査を多く受けましたので、年間30万円ほども費用がかかっていました。

夫は理解してくれましたが、私は夫に何度も、ごめんねと謝っていました。

- 3 そうはいつでも、今年に入り、首の痛みや疲れの症状は、以前よりは良くなってきました。

私は、仕事をしていないのだからせめて家事くらいはと思い、一生懸命やろうと思うのですが、それでも1日のどこかで1時間くらい休みを取らないといけません。夫や両親に頼ることも、まだまだあります。

- 4 また、最近出てきた新しい症状もあります。

上で述べたような記憶障害や言い間違いは、平成26年になってから出てきたものでした。

他にも、平成26年3月ころから、かかとのしびれや痛みが出てきました。

軽くなってきたとはいえ、首の痛みや疲労、乗り物酔いなどもあります。

ガリウムシンチで指摘された内臓の炎症もそのままですし、炎症を示すCRPの数値も高いままです。中でも、もっとも心配なのは、心不全につながる不整脈があることです。

新しい症状が出てくるということには、これからどうなるか分からないという不安があります。また、症状が進行したのではないかと考えてしまいます。

第5 おわりに

最後に、私の思いを述べます。

最近、ワクチンをまた推進しようという動きがあります。私はそれが怖くてたまりません。私の子どもは男の子ですが、男児にも接種させようという意見もあるようです。私の子どもたちには、絶対に、接種させたくありません。

自分に症状が表れてから、他の被害者の方のことも知るようになりました。私も苦しんでいる症状がありますが、もっと重篤な方もいます。10代や20代の若い方が、私よりも重い症状を抱えていることを考えると、どれほどつらいだろうと思います。

かつてあれほど接種が推進されたということは、子宮頸がんワクチンで利益を上げた人々がいるはずですが、その影で、私たちのように苦しんでいる人がいます。安易な再開をする前に、事実関係を調査して、情報もきちんと公開して、補償などの制度も整えて欲しいです。

第1 はじめに

私は、平成8年7月生まれで、平成26年6月現在17歳です。

中学3年生の平成23年8月から高校1年生の平成24年3月にかけて、3回にわたり、子宮頸がんワクチンであるサーバリックスの接種を受けました。

サーバリックスの接種を受けるまでは、特に健康上の問題はなく、運動するのが大好きだったので、部活動を頑張っていました。部活動は新体操で、県大会に出場したこともあります。

小さい頃はぜんそくがありました。小学校4年生の頃にはほとんどぜんそくが出ることもなくなり、中学校に入ってから、まったくぜんそくが出ることはなくなりました。中学校を休んだことは、ほとんどありません。

他には、小学校4年生のときに腹膜炎で入院したくらいで、中学校に入ってから以降は、健康には何の問題もありませんでした。

私は、学校での勉強と部活動を頑張り、友人ともよく遊ぶ普通の生活を送っていました。

第2 子宮頸がん予防ワクチン接種を受けることにした理由

私が予防接種を受けようと思ったのは、市役所からもらった手紙がきっかけでした。手紙には、子宮頸がんを予防できるワクチンの接種が無料で受けられること、中学3年生の3月までに接種を受ける必要があること等が書いてありました。

この手紙が来るまで、私は子宮頸がんの予防接種があることを知りませんでしたが、市役所からの手紙を読んで、予防できるのであれば打たなければいけないと思い、手紙に同封されていた一覧に記載のあった、最寄りです予防接種を受けられるクリニックに連絡しました。

私の住んでいる市では、ワクチンが不足しており、順番待ちをすることになりました。

第3 予防接種ワクチンの接種

平成23年8月1日に、私は予約をしていたクリニックで1回目の予防接種を受けました。ワクチンはサーバリックスでした。

接種を受けるとき、医師や看護師さんから、予防接種についての説明はとくにありませんでした。予防接種について説明する書類はもらいましたが、何が書いてあったかはよく覚えていません。

接種後、注射された上腕に痛みがあり、今まで受けた他の注射より強い痛みを感じました。この時は、注射を打ったところが少し腫れ、3、4日は熱を持っていました。

平成23年8月30日に2回目の接種を受けました。

この時は、接種の翌日に38.3度の熱が出て、体調がすぐれないことが1週間ほど続きました。8月に新体操の県大会があり、練習を頑張っていたので、その疲れが出ているせいだと思い、予防接種が原因だとは思いませんでした。

その後、頭痛や肩こり、顎の痛みや倦怠感といった体の不調が出てきて、学校に行くことができなくなりました。接種後の体の状況については、改めてお話しします。

その後、平成24年3月15日に3回目の接種を受けました。

2回目の予防接種の後、体の不調は続いていましたが、予防接種の副反応とは考えもしませんでした。

第4 予防接種ワクチン接種後の症状

平成23年8月30日に2回目の予防接種を受けて以降、ときどき頭痛や肩こり、顎の痛みといった不調が出るようになりました。

同年10月3日には、突然口がほとんど開かなくなり、怖くなって早めに下校しました。家で計ったところ、1.5cmしか口が開きませんでした。その日から、頭痛、顎の痛み、耳の痛み、腹痛、腰痛、微熱、だるさ、光を眩しく感じるといった不調が起こり、鎮痛剤も効かないため、学校に行くことができなくなりました。

同年10月から11月にかけて、県内の総合病院3件、個人医院を数件受診しましたが、原因がわからず、鎮痛剤を処方されるだけでした。

同年12月、現在も通っている歯科医を受診して顎関節症の治療を始め、徐々に回復し、平成24年2月後半には学校に行けるようになりました。

3回目の接種後の平成24年4月、私は高校に進学しました。

その後、5月に入ってすぐにひどい風邪をひき、脱水症状が1週間も続いたため、点滴を受けるということもありましたが、学校へは通えていました。

同年7月から9月にかけては、以前にくらべて体調は落ち着いていましたが、それでも、頭痛やだるさ、疲れやすさがあり、週に4、5回ロキソニンを服用していました。

同年10月には、2回風邪をひいたばかりか、何年も出ていなかったぜんそくも出るようになりました。また、今までの体の不調に加え、アトピーも出てきました。

同年12月、県外の医師を受診したところ、橋本病との診断を受け、食事

療法とチラージン S25 錠、及び漢方薬による治療を始めました。この時の検査で、肺が炎症を起こし、心臓も少し肥大していると言われました。

顎の痛みがなくならないため、歯科医に相談したところ、親不知を抜けば改善する可能性があると言われたので2本抜きましたが、痛みはなくなりませんでした。

平成25年7月、上記の県外の医師に子宮頸がんワクチンの接種を受けたことを話したところ、医師から、今の症状はワクチンの副反応だと言われました。

その後は、顎から頭にかけての痛み、膝や背中を中心に全身を移動する痛み、ひどい倦怠感、口内炎、睡眠障害のための昼夜逆転といった症状が続き、平成25年12月以降、学校にほとんど行くことができなくなりました。

結局、上述のような様々な症状のため学校に行くことができず、高校は留年となりました。

第5 現在の状況

受診していた県外の医師の診察を受けることができなくなり、地元の病院で改めて検査したのですが、結果、橋本病ではないと診断され、橋本病の治療として服用していた薬はやめることになりました。

現在は、顔や首の激痛で首が動かせず、ひどい生理痛、歯や歯茎の痛み、全身の疼痛、腹痛、倦怠感等があり、1日中動けないときもあります。また、喉の渇きがひどく、1日に水を3、4リットル飲むような状況です。

学校は、平成26年4月から、毎日1時限だけでも授業を受けるよう頑張っているのですが、それでも様々な症状のために学校に行けない日が多く、困っています。

このままでは高校を卒業することはできないと思うので、今年の8月、11月には高校卒業認定試験を受験する予定ですが、それも体調不良でかなわない状態です。家での勉強もまともにできません。

第6 多くの医療機関の対応

これまでの間、たくさんの医療機関を受診し検査してもらいましたが、体調悪化のはっきりした原因はわかりませんでした。私自身、子宮頸がん予防ワクチンが体調の悪化と関連があるとは考えてもいませんでした。

第7 終わりに

今一番つらいのは、首や肩、手足や顔、顎の痛みがずっと続くこと、息苦しいこと、体がずっと疲れていること、そのため学校に行けないことです。疲れ

をとるために寝ようとしても、いくら寝ても疲れが取れず、また寝る方が疲れることもあり、どうすれば体調がよくなるかわからないことも、とても大きな不安になっています。

子宮頸がんワクチンについて深く勉強したことはありませんが、実際に副作用をかかえる人がたくさんいるのですから、やめた方がよいのではないかと思います。

できることなら、予防接種を受ける前のように、学校に行きたいし、友達と遊びも運動も思い切りやりたいです。

HPV ワクチン（子宮頸がんワクチン）副反応被害報告集 愛知県第1集

2014年10月19日発行

発行元 全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会 愛知県支部
薬害対策弁護士連絡会
薬害オンブズパーソン会議

連絡先 薬害対策弁護士連絡会 HPV 研究会名古屋事務局

〒460-0002

名古屋市中区丸の内2-10-19 市川ビル7階
高岡法律事務所内

TEL 052(228)7243

FAX 052(228)7246